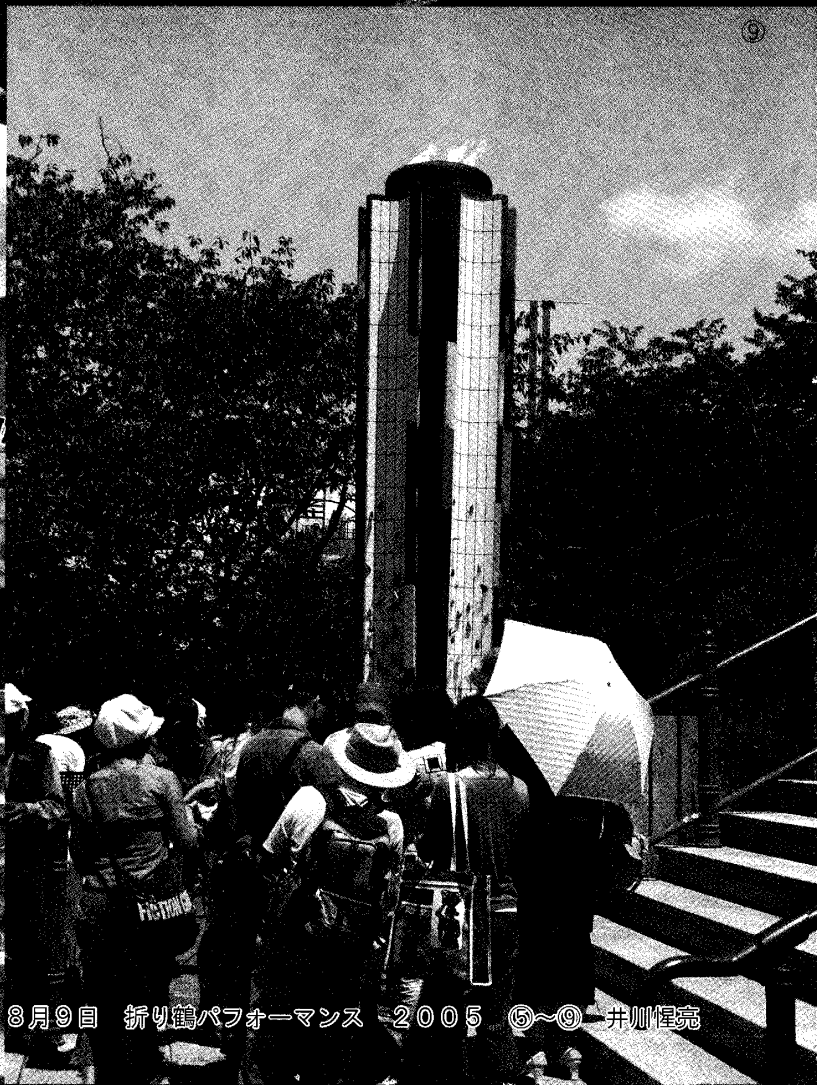




⑤

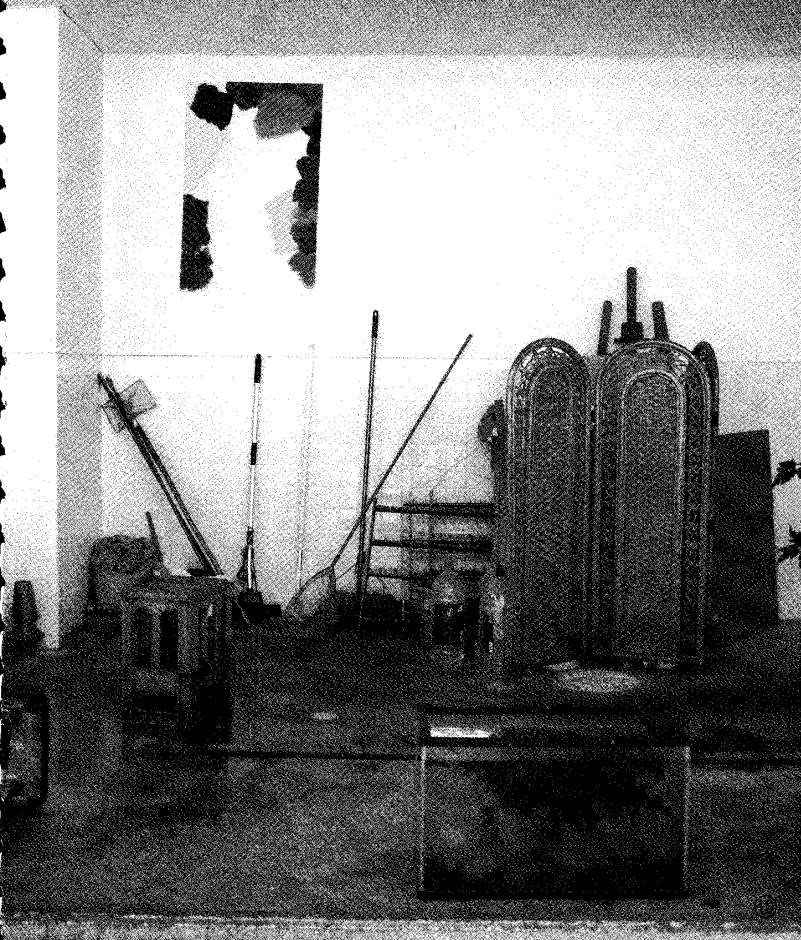


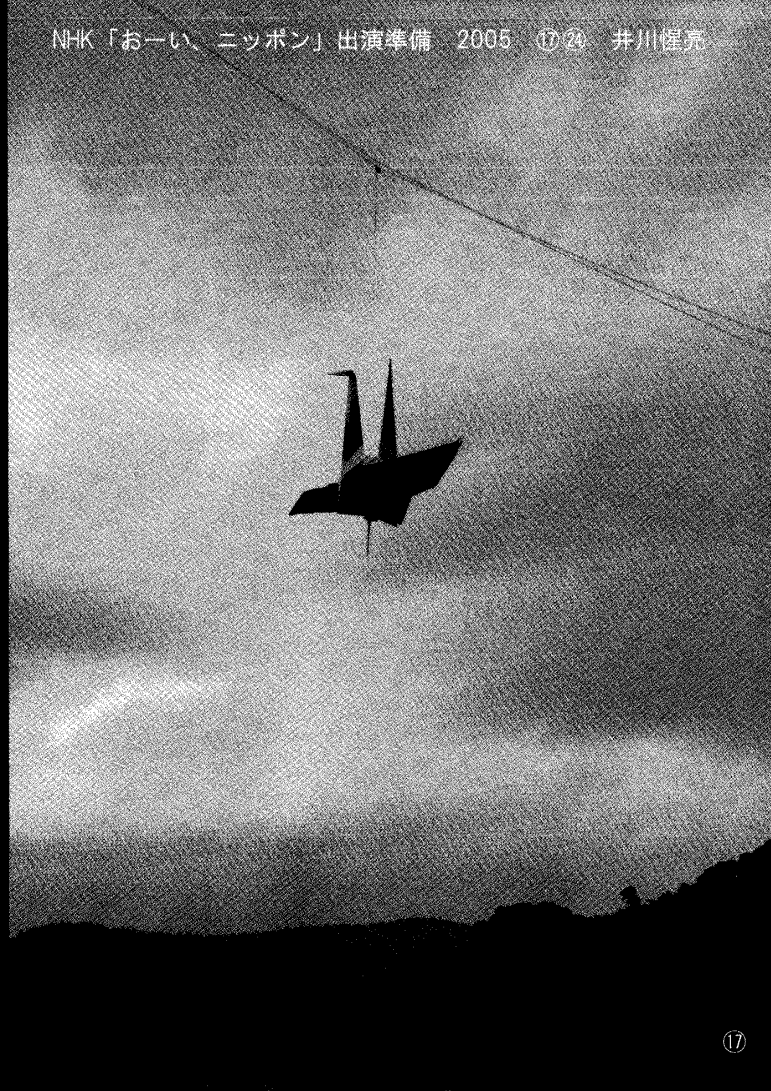
⑧



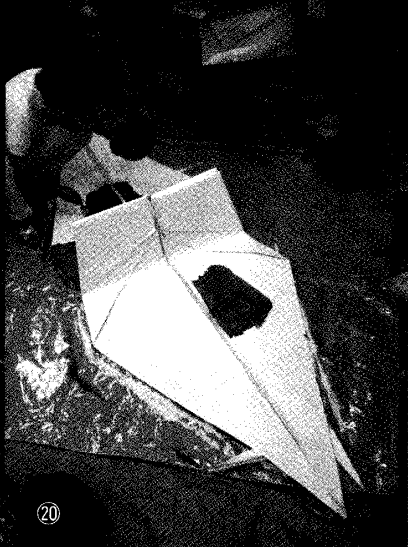
⑨







サイエンスワールド in 有馬小学校  
2005 ②⑤～②⑦ 井川惺亮





## 絵画の周辺、そしてその最前線：絵画 VI

被爆60周年における絵画活動 2005

井 川 惺 亮

### Propos sur la peinture et son avant garde : mon travail VI

Pour le 60ème anniversaire de la Bombe Atomique 2005

Seiryō IKAWA

#### 8+9展

20年ほど前だったと思うが、「8月9日には、なんかせんば。じっとしておれんばい」という地元絵描きさんたちが集まり、S絵の具屋さんがとりまとめをされながら「8・9展」が発足し、県美博などで開催されていた。そのことを私のゼミ生K君から聞き、彼から参加を勧められ出展した。ところが、2年ぐらい経ってからの打ち合わせの席で、「よそもんには、わからん！」と言われ、はじき出されたようなショックがあった。あまりの驚きで、どんな内容だったのかさえ思い出せない。

すっかり戸惑ってしまった私は、またゼミ生等からの忠告もあり、「私たちは別途、ささやかであっても平和展をやろう。このことこそが平和なんだ」と言い合う彼らに勇気付けられながら、初めは、洋館などを使用してゼミ生2、3名で細々と、展覧会名は「長崎は生きている」として作品展を開始することにした。やがてメンバーが増え数えてみると17名いたことから「8+9」へとタイトル名が付けられ、その名が現在に至っている。

発表会場は南山手の洋館群や長与町立図書館、浦上の市場（いちば）などを使用しながら、最近では浦上百貨センターギャラリーに落ち着いてきた。ところが、折角私たちが少しでも市場を活性化しようと、展覧会を立ち上げてきたこのギャラリーが今年初めごろ急に閉鎖されることとなり、途方に暮れていた。

今夏は被爆60周年なので、「10年前の50周年祈念企画とは打って変わって、学内の施設ではんのささやかにしよう」と、ゼミ生たちと考えていた。そんな頃、「再び浦上百貨センターギャラリーで作品展をして欲しい」と市議の中村すみ代さんを通して連絡があった。当初、その原因が私たちの作品発表における使用の仕方だったのか、よく分からずに作品発表が中止に追い込まれたものとばかり思っていた。それが復活話に接すると、面食らったが、一方で私たちの美術による地道な活動が見直されたのだとゼミ生たちと喜んだ。

#### 東松照明氏見える

「元々浦上の地にある、しかも浦上の名がついているこのギャラリーが再開するなら、やろう！」と復活特別展として「8+9」の平和展で幕開けとした。

空き店舗であるこの会場は、店と店との間に壁がなくガランとして柱が目立ち、散漫として、また薄暗い空間でもある。従って発表者として、自然と作品展示が柱の面に頼りがちとなり、仕方なく小型化していくので、私は心配であった。ところが今回、復活という意気込

みで会場に向かい、しかしおもむろに展示し始めていると、前にも増して市場の方々は私たちに気を遣ってくれている様子が伺える。会場は以前よりずうっと広がり、用意していた大きめな作品を皆で積極的に飾りつけた。

私たち研究室は、本学公開講座を6月より毎月1回で実施し、9月には渡韓しての「韓・日展」、10月にはハウステンボスでの「ごみゼロ運動全国大会」のリサイクルアートとサイエンスワールドの出前授業などのプロジェクトが同時進行中であつた。更に8月初旬に灯台モニュメントの清掃と補彩をせねばならず、「8+9」の初日に展示会場に出向くほどの時間も取れない状況であつた。それでも今回の作品発表は被爆60周年と名を打っていることもあり、とにかく初日に皆で厳かに出向くことにした。

ラッキーだったことは、写真芸術家の東松照明先生が早々と見に来られたことだ。先生は前よりもお元気そうで、私たちへの暖かな眼差しに、私はとても嬉しかった。東松先生は学生の作品もいちいち丁寧に見てくださり、ある者には「途中を残すことは勇気が必要ですね」などなどと、その都度感想まで語ってくださった。(写真⑪)

途中で私の展示した場所に来られた。魚屋が使用する大きな流し場兼物置場の、蜘蛛の巣が張っている奥の壁に私は自作を取り付けた。(写真⑩) 流し場となっている地面は水溜まりがあり、びしょびしょに濡れていたにもかかわらず、つかつかと入って来られた。「日常的生活感があっていいですね」と実にさわやかに言われた。まことに有難いお言葉であつた。この光景はまさに東松先生がカメラで撮影されているような錯覚を覚えたほどだ。本当に恐縮してしまった。

展示場が市場と言うこともあり、案内状を郵便などで差し出しても、来られる方はわずかである。来客の期待もできないような、まだ市民権を得ないギャラリーでの出来事として、東松先生は以前から私たちの作品展には芳名録に記帳されておられるが、特に今回の先生のお姿に深く感動したのだった。

東松先生は、長崎に住みながら写真芸術家として被爆長崎の生き証人であり続けておられる。「このようなお方が会場に見えられただけでも平和！」とは、参加学生たちの感想だった。

## 灼熱の記憶

毎年8月になると、平和の日を迎える。「今日も灼熱の暑さだ」と汗をかきながら歩く。炎天下、冷房の効いたチンチン電車に乗り、松山町電停、あるいは浜口町電停で下車してから爆心地に向かう。このうだるような日差しに、「被爆の瞬間は、このような猛暑の中で実行されたのだ」と、長崎の真夏がやって来る毎に、そう思ってしまう。

この灼熱の暑さに、当時被爆された方々や、そしてお亡くなりになられた方々やご遺族の方々の、過酷で地獄のような苦しみは、いかほどだったのか。それは、6000度の爆熱と言う。もう私の想像に絶する思いだ。そして、このうだるような長崎の暑さの空気に触れると、私の肉体にも痛みのようなものが伴い、また何かやるせない怒りの感情が高ぶってくるのを覚え、蟬の声を聞けば、また夾竹桃の花を見れば、それらが一段と脳裏をかすめる。

もう例えようもない熱さとその中にあって、その暑さを思うと、とたんに思考力が止まってしまう、息苦しくなってくる。このような息苦しさは、最近の私に夏の季節から感じるのだが、現実的には身体的な暑さから、もう解き放って欲しいとさえ願うばかりだ。

このところ、環境が整ったと言うべきか、あるいは贅沢になったと言うべきか。もしくは

たらその反対になってしまったのかもしれない。それは、研究室の冷房に身を委ねるようになったからだ。でも冷房は性に合わないので、時折冷房を切る。しかしながら一度味わった冷房の快適さは、またそれに浸りたい気持ちになり、条件反射的にスイッチを入れてしまう。最近では肉体も衰え始めているので、冷房を切り、終日のうだるような暑さの中で過ごす、夕方には頭がぼけてしまい、ひどい疲れを感じる。そこでまたスイッチを入れる。

老人化した肉体に、このうだるような暑さは、もう一方で幼年時代の汗をかきながら寝床についていたことなどを思い出す。その光景に重なってくるものは、海水浴で真っ赤に日焼けをし、肌がひりひりとし、その後水ぶくれとなり、そのかゆさを無意識に指で水泡を引っ掻き、破ってしまい、もう寝返りが出来ないほど辛い思いをし、あるいは夢中で昆虫採集をし、あのまぶしい真夏の光が眼球の奥底に懐かしく想うことなどだ。

## 個人プレイからの脱却

10年前、私の研究室では、「被爆50周年祈念アートフェスティバル」(NHKなどとの共催)と言うタイトルで全国的な規模で作品募集をし、市内9箇所を展覧会場に、また世界的なアーティストなどを招いて、本学の公開講座「被爆50周年を考える現代美術」とジョイントして大掛かりな美術展を企画し、平和の日に合わせて実施した。

あれから10年が経過したが、これまで毎夏平和の日を因んで、前述したように私は学生たちと美術活動を展開してきた。今年は被爆60年目を迎えることもあり、その意味も含めて爆心地の被爆の丘に設置されている「長崎を最後の被爆地とする『誓いの火』灯火台モニュメント」(通称「ナガサキ誓いの火灯火台」とも言う)の着彩上の修復を行ったり、前述のように作品発表をしたりした。

私は84年から長崎に定住し始めたが、当時私が東京から離れる時、「長崎は現代美術が不毛の地、何しに行くの?」など、と多くのアーティストたちから言われたり、驚かれたりしたので、少なからずためらった。案の定、そこには現代美術も、そのような発表の場や美術館もなかった。

このように美術活動の次元が全く異なったところに放り出されてしまうと、アートの役割を少しでも考えようとするものだ。長崎に来るまでは、とにかく「いい仕事(制作)すること。それが第一で、教育とか平和とかは二の次だ」と先輩諸氏から諭され、そう信じてきた。恩師たちはどうであろうか。VIALLAT先生は「アパルトヘイト展」に出品されていたし、野見山先生は「戦没者の祈りの画集」を作られていて、それらを見る限り、人類愛や平和などが芸術の根幹に備わっており、それが必要なのだと教えられる。繰り返すが、私が長崎に放り出されてみて、「アートとは?」を問いかける機会となった。

これまで長崎で学んだことは、既に述べたことがあるが、「アートの活動は個人プレイからの脱却であり、そこに新しい美術活動の展開を切り開かねば」ということだった。そして、これも繰り返し語ったことがあるが、私は公募展に応募したことは、皆無に等しい。その言葉自体を嫌って避けて今日まで来し、そもそもコンクールそのものを聞くだけで気が重くなり、土台、美術活動は、第一、競争の原理にそぐわないと感じていたからだ。

それなのに、その85年頃の新聞紙上に、「灯火台モニュメントのデザイン募集」が記載されていて、それに心が動かされたのは、私が長崎に移り住んだことの意義と爆心地の持つ場所性を問い、アートが医学のように人類の平和に貢献できるのではないかと思ったからである。

そこで勇氣百倍、応募することにした。このようなことは後にも先にもない出来事となった。

偶然にも、採用されたこのモニュメントは、87年の夏に建立し、その年の8月9日に、渡辺千恵子氏によって灯火された。今夏で18年目となった。(写真⑧⑨)

### 灯火台モニュメントの形状

本モニュメントの形状の概略について述べると、モニュメントの平面図（断面）から見ると、基本的な形態は星形五角形であるが、立面図（構造）から見ると、平面図でのV型のコンクリートが柱状として5つ立ち、つまり平面図上では、V型の鋭角が内側に向かって、それぞれ5対が環状になるように組み合わさっている。

V型外壁は白いタイルで覆い、V型のコンクリートの厚み（外側の一部）と内側（コンクリート面）に内包する色彩として着彩している。(写真⑬)

色彩表現というものは、表現意図を高めるため、内壁よりも外壁に着彩することを優先し、そのことによって色彩表現は、その存在を主張し続けることになるからだ。また一般的な表現手段としても皆それを望むだろう。では現代美術の立場ではどうであろうか。その手法を真っ先に採用するのが、自己主張の激しい表現手段をとる現代美術だろう。

しかし、私は、平和と言うテーマ性をより助長するには、逆に色彩をコントロールし、外壁面の白いタイルで包むことにした。こうして内包する色彩は、V型の柱同志が上空に向かって末広がりの構造へと上昇し天上に舞い、世界に羽ばたく「平和の色」としてイメージした。(※1 作者コメントAを参照)

これまで本モニュメントの彩色による修復（つまり補彩）は、今回で3度目となる。1回目は1995年、被爆50周年として、2回目は2000年をそれぞれの節目として、外壁部の着彩している部分のみを実施した。今回は、同外壁部と内部壁面着彩部にも補彩を行うことで、モニュメントの存在を促せるようにした。

### 補彩という言葉

着彩した野外のモニュメントは、何と言っても過酷な紫外線や太陽熱による高熱と、それに加えて、雨ざらしの条件下におかれると、着彩部は脆くなっていき、当然、退色が進む。やがて修復を考えねばならなくなる。

修復と言う言葉をダイレクトに使っても良いのであるが、修復を専門的に扱った経験から言えば、今回は、退色した色そのものを同色で皮膜して行く手法なので、補彩をしたと言うのが相応しいように思う。が、いまいち、しっくりこない。それでも行為の工程では補彩と言いたくなる言葉である。本来の補彩とは、修復のプロセスの中で出て来る言葉である。例えば古典的な絵画作品を修復すると言えば、完全（完璧）さが伴ってきて、ごまかしの効かない徹底した作業を指して言う。具体的に、例えば画面上痛んだ色層部を拡大して説明すると、その色面上である部分で剥がれたところがあれば、その部分を最後の仕上げあたりで、この剥がれて窪んだ部分をカオリンなどで充填し、その上から見掛けの色で補う、つまり補彩をすることによって、あたかも元に戻ったかのようにすることだ。このような完璧な作業を実施して初めて修復したと言うべきだろう。

その点、今私が言う補彩は、伝統的な修復とは違い、紫外線や高熱によって退色したり、薄くなったりしたところを全面的に上から色を覆い被せる手法を言い、更に私の場合、その



時に付随する行為性を現前化していることも含んでいるから、これをまさしく色を補う行為、すなわち補彩と呼んだ方がぴったりと言うわけだ。

先にも述べたように、まさしく色を補う行為、すなわち補彩をするにあたり、前以て下準備すべきは、まず、表面の洗浄をすることである。次に補彩すべき部分には、軽くやすりをかける。その埃を掃ってから、着彩に取り掛かる。この際、以前のタッチに合わせて行うことが原則だが、しかし戸外であるため雨水が流れやすくする道を作るということも必要となってくる。今回は、雨水などが溜まると、そこに埃などの付着やカビなどが発生しやすいので、そうならないように、たとえ以前のタッチが水平や斜めであったとしても、それを全て垂直面の縦のタッチに変えたことである。

ここまで述べると、補彩と言いながらも、いかにいい加減な修復をしたかを告白したわけだが、しかしながら、修復は、その時その時の判断力に委ねられていくケースが多く、いい加減どころか、結構真剣勝負的な行為が伴っていることも事実である。

それから公的な場所などに保管されている作品の修復作業は、何がしかの暗黙の了解の下で実施しているようで、著作権などを問題にするなどということは、社会的に起きたということをお前は聞いたことがない。それは、修復すべき作品について、作者に了解を取る法的手続きなどがどのようになっているのだろうか、むしろ公的な場所側が作品保管上において必要と認めた場合、修復を実施しているのが現状のようである。今後、作者から「勝手に修復をした」など、と訴えられる可能性があるだろう。

このことは、原作者が今回のような作品修復を命がけの作業を通して、著作権問題を痛感したからだ。原作者は作品保持のため、修復については、現状維持か、あるいは出来た当時のような発色を期待するかなどを選択する。もちろん予算などの十分な補償と時間があれば、その選択の中は広がる。しかし現代日本の文化レベルでは、何の保障があると言うのだ。これまでに十分な補償など出合ったことがないし、それ故、私のようにいつももどかしく感じているアーティストが殆どであろう。

ここまで来ると、今回の野外にある本モニュメントでは、作者は、着色の部分的な化粧直しを優先するしかない。この化粧直しでも、今後のことを配慮すれば、例えば筆触のタッチの方向の変更さえも出て来る。それを決断するのに諦めに似た空しい気分にもなるが、そう判断することは、本当に怖くて、そして勇気もある。修復の判断は、何よりも常に社会的な判断を要求されながらも、かつもっとも効率のよい方向へ、あるいは悲しいことだが、それは、どこかで妥協しながらでも現状を維持するほか方法がないと言う諦めに似た方向へと、舵を向けていかねばならないのも事実であることだ。

モニュメントの恒例の掃除は、今年は8月1日に実施した。今回は補彩を行うので、掃除は念を入れた。

## 綱渡りの補彩？

ところで、本モニュメントは、楕円形の台座上に高さ5mでそびえている。普段使用する脚立では、モニュメントの天辺までは手が届かない。今回はそれよりも背の高い2m脚立を準備した。それを開架し梯子状にしてモニュメントに備え付けた。

修復の手順は、基本的には、塗装作業と似ていて絵の具が飛び散ることを考え、高いところから暫時下へと向かって作業を行うが、(写真⑫) 絵の具の乾燥など配慮すれば、ある時に

は下方で着彩を進め、見上げた時に塗り残しを見ついたりしながら、しかしその隣がまだ乾燥してなくて、他の箇所に着彩しながら作業を進めていく。(写真⑮⑯)

脚立によじ登って、一番高いところでの作業では、モニュメント自体の柱が末広がり状になっているため、そこでは垂直に立つと、背筋はやや反るようになる。モニュメントの端を左手でつかみ身の安定を図るが、それが思うようにつかめない。右手で筆を持って描く姿勢を取る。元々左手は絵の具の容器を支えるのだが、今左手は、脚立から落っこちないように支えねばならないので命綱のような格好となる。それでその絵の具の容器は紐をつけ首からぶら下げることにより、容器の中が胸に当たり余計に身を反らすことになる。(写真⑭)

左手は、V字の側面をつかむが、白いタイルはじりじり焼けて熱い！まるでピンセットでつかんでいる状態となり、瞬間、瞬間、めまいがし、今にも落ちそうになる。それで怖さが襲ってくる。おまけに反射光でその紫外線の跳ね返りも暑く、「先生、日焼け止めクリームは？」と仕事始めに学生が助言してくれたことを、両耳補聴器が壊れんばかりの蝉の声で思い出した。私には日焼け止めクリームを塗ることなどもってのほか、色を塗るもっと大切な任務を今遂行せねばならないのだ。

私のペイントする行為はこうした極限の上に今回は成り立ち、まさに命がけの着彩となった。通常の場合の補彩などの修復の姿勢は、描きやすい安定した状態で実施するのが普通であるが、今回のように脚立から落っこちてしまうかもしれない、あるいはそうした状況の中での描く行為そのものが、同時に体力的な限界などに追い詰められた状況で描く。繰り返すが、描くという行為が限界状況に巻き込まれ、そうした中の筆触は、行為そのものに還元されていたように思う。あのゴッホが風景を描くのに、ミストラルの中で身震いをしながら、うねるような風景を描き出したのも、一種の極限が生み出した芸術だと言える。モネにしても大きなキャンバスを屋外に持ち出し、現場で描く行為は、さらに描く行為が拡大されながら現代の美術のパフォーマンスへと移行されて行った観がある。

今回の補彩における筆触は、繰り返すが、身の危険を感じながら高いところでの制作、しかもその状況は灼熱の中での制作、それはまさに行為による補彩の筆触群となった。とは言え、被爆の6000度の原点に戻ると、被爆の60周年などと言う被爆の節目などどこにもないことに気付かされるし、これから先もない。今まさにペイントしているだけだった。私が3日間に渡って日中の強烈で過酷とまで感じながらの紫外線を浴び、極限の行為として着彩することを自覚した時、改めて被爆の瞬間を重ね合わせると、私が言っている行為の極限などと言ううぬぼれは、木っ端微塵に吹っ飛んでしまうのだった。

それでも私は補彩したことの責任を考えてみた。

### 平和の輝き折り鶴群

化粧直したモニュメントは、自らが手掛けた補彩をほめるようで恐縮だが、それは平和の日に太陽にまぶしく思いの他、一段と輝いて見えた。9時半ごろ到着し、前以て用意していた折り紙で折り鶴したものを数個、参加者への固定用の例としてあらかじめモニュメントに貼りつけた。そして通行人に呼びかけ始めた。

都合が良いことに、爆心地公園から平和資料館へ行く道に石段があり、その石段を登っていくと踊り場があり、その左側に本モニュメントが設置されていることと、そこを往来する通行人に「折り鶴を折って平和を願いましょう！」「折り鶴をどうぞ！」などと呼びかける

ことが出来る場所でもある。(写真⑨)

11時2分に1分間の黙祷。この沈黙すべき時に、昨年までは市民団体などが公園外にも溢れ、その上まだ爆心地に到着できず、平和への掛け声であろうか、叫び声のように外路地からガヤガヤと聞こえてきていたものだった。今年は比較的それらの叫び声もおさまっていたが、相変わらず蝉の声がうるさかった。それでも1万人はゆうに越していると思うほどの人々で溢れていた。その後、モニュメント周辺の道は、次第に歩行者も増え、団体や家族連れなど、外国人の顔も多く見かけた。

私たちの呼びかけに応じて、モニュメントの前で、あるいはその台座の上で隣り合わせになりながら鶴を折る。中には鶴の折り方を知らない世代もいたり、またお年寄りで忘れかけたりした方もいて、皆で会話しながら折るというひと時を持った。中には黙々と手先の鶴に集中する人々。(写真⑥⑦)そして折り鶴がモニュメント上に色とりどりに飾られ増えていく。

次々に飾られていく光景を見ていると、このモニュメントが持っていた元の意味が、つまりこのデザインの概念が消失し、しかも作者がここモニュメントのそばに居ることさえも、置き去りにされたかのように、最早そのこととは関係のないところで、未来のモニュメントとして新しく一人歩きをし始めていたのを私は知った。(写真⑧)

その光景は、繰り返すが、作者は置き去りにされながら、白いタイル上のこの輝かしい折り鶴群に新たな美の感動を覚え、思わず、今新たな美が未来に輝く平和の道を切り開いているその瞬間を、折り鶴の飾りの群から強く感じるのだった。

取り付けられた折り鶴（折り鶴パフォーマンス）は450羽以上の鶴群となり、夕陽に映え、ますますその輝きを放っていく。このパフォーマンスは、折り鶴をする人々の皆の願いである平和と、同時に平和の希望を語り合い、そして未来に輝く平和を感じる美的行為なのである。これまでは、被爆は悲惨さを表現することが必要条件であったし、使命でもあった。しかしながら今の若者たちに平和を語る時、彼らは、その悲惨さ故に何をすべきなのかを、最早考えようとはしなくなってきたようだ。そこで平和学会の高橋眞司先生は「戦争責任」から「平和責任」へと平和の論理を進められたり、多くの人々によって様々な平和へのアプローチがされたり、皆それぞれ努力されている。

私は85年当時、このモニュメント制作に関わった時、「未来に輝く平和とは」を自問し始めていた。このモニュメントが出来上がったとき、被爆3世のA学生が、これを見て「これで、今までの重苦しさから開放された気分となり、やっと平和が来た」と叫んだことを思い出す。私は、この作品に対して、時代を先取りしていたかのような若者が、早くも共鳴してくれたことに感無量だった。

## 五輪への折り鶴

オリンピアの丘からはるばると運ばれて長崎にやって来たこのモニュメントの『誓いの火』は、今年のオリンピックが開催地ギリシャ・アテネであり、それに因んで里帰りとなった。実は、灯台モニュメントの運営委員の宮本圭子さんから「NGOピースボートから五輪停戦キャンペーンとして話が舞い込んだ」との連絡を受け、続いて「灯台とどうリンクさせたらいいのか、何かよいアイデアがあれば考えて欲しい」と依頼を受けた。

そこでこの『誓いの火』のモニュメントでは、平和の日に「折り鶴パフォーマンス」を実



施し、その結実として「折り鶴」制作を思いついた。そこで、私は「ピースボートが今回、北半球航海を寄港しながらギリシャまで行くことから、その船内や港各地でこの折り鶴を折り込んで鶴に仕立て上げるという平和の儀式を行ってもらいながら、目的地オリンピックの発祥地ギリシャ・アテネに近いピレウス港に下船し、『誓いの火』と共にオリンピックまで運ぶこと」を宮本さんに提案（※2「作者よりのメモB」を参照）をした。すぐに同意され、「是非それで行きましょう」ということになった。その折り鶴は、和紙を継ぎ足し、横の長さが2m大の鶴になるように折り込み、その上に灯台モニュメントに使用した9色を着彩する。運ぶ時はこれを折りたたみ（解体し）、簡単にダンボールにしまい込めるようにした。（写真④）実はもう一つ、アテネオリンピック開催オープニングセレモニーに献納するものとして、結局のところ2対の折り鶴を制作することにした。

採火セレモニーが昨年の7月9日（金）夕方、ナガサキ誓いの火灯台モニュメントの下で広場で行われた。ここでは特に折り鶴を着彩した四角紙を折り込んで鶴に仕立て上げる平和のパフォーマンス（儀式）を私の研究室の学生によって、（写真②③）また原爆落下中心碑の前でギリシャ人によって実演された。（写真①）

こうして折り鶴は、『誓いの火』と共にピースボートの船旅に出たが、元気でアテネにたどり着き、オリンピックの開催セレモニーにも花を添えたことだろう。

### 舞い降りる折り鶴

NHKでの「おーい、ニッポン 私の好きな長崎県」（11月6日放映）に、今度は横の長さ3mあまりの折り紙による大折り鶴が登場することとなった。（写真⑰⑱）

今夏のある日、長崎県美術館に「ホイットニー美術館展」を見に行った時、当館長である伊東順二氏から、NHKのスタッフを紹介された。何でもNHKが11月に「おーい、ニッポン」を長崎で実況放送をするにあたり、その企画イメージについて、その知恵を借りたいとの依頼を受けた。伊東館長からの推薦でもあり、直ちに私は協力することを了承した。

話を伺っていると、パイプオルガンを設置している新戸町の活水大学が舞台会場となり、そのクライマックスにローソクのようなもので光のモニュメントを設定し、そして大島みちる氏の折り鶴の歌などが紹介されるとのことだったので、すぐさま私は爆心地にある灯台モニュメントで平和の日に実施している「折り鶴パフォーマンス」やピースボートの「折り鶴」のことを話したりした。

こうして折り鶴の話題が膨らみ、私のプランとして「折り鶴」の制作をメインにした構想を練ることになった。その後、現地の下見をした上で、私は具体的なたたき台を作成し、その案を基にNHKとの打ち合わせを数度重ねていった。もちろん、その会合には研究室の学生たちも参加してもらい、彼らの意見も取り入れながら企画プランを修正したりした。

とにかく今秋、いくら芸術の秋だと言っても、かなりスケジュールが立て込んでいる。これらを一つ一つクリアしていかなければならない。NHKのこの生放送が11月6日（日）であるが、前述したように、その前に10月16日（日）は本学公開講座「地域に根差した美術」、10月23日（日）はハウステンボスユトレヒトでのワークショップ「ゴミを芸術品に変身!」、10月30日（日）はサイエンスワールドの有馬小学校でのワークショップ「色と折り紙」があり、（写真②⑤-②⑦）11月13日（日）は平和学会で「平和と芸術」を報告し、その翌日には日韓展のため、韓国のご一行をお迎えし、15日から交流展が1週間繰り広げられる。その間、紀要（本稿）や

叢書の原稿を着手しようにもどうにもならない日々となった。まさに泣き面に蜂の最悪の境地にいる。

NHK番組も2週間近くとなった。鶴の着彩が大詰めとなり、(写真⑱⑲⑳㉑) やっと気にかけていた鶴の骨組みに取り組み始めた。(写真㉒㉓) これは和紙といえども大きさが出てくると、折り込んで鶴の形を作り上げようとしても、羽や首や尾がぐにゃぐにゃになってしまうので骨組みが必要となってくる。その骨組みの構造を調べるため、小さな折り鶴の解体を試みることとなった。その時、前野良沢や杉田玄白の「解体新書」を想ってみた。(写真㉔)

現在のところ、同時進行で進めている日韓展の準備もしながら、この折り鶴がどのような形で仕上がり、そして外界にどのように適応し、更にどう演出するのか、大きな不安を抱えながら、その日を迎えようとしている。

そして、平和学会での分科会「平和と芸術」で口答発表をするが、私はこの折り鶴がどこから来て、どこへ行くのかを語ろうと思う。何よりもその前に、原爆落下中心碑の考察を被爆60周年として報告したいと心待ちにしている。

#### ※1 作者のメモよりA (NGOピースボートへの説明文として)

“長崎を最後の被爆地とする灯火台モニュメント制作について”

##### I 灯火台モニュメントの「火」の持つ意味・意義・波及

- ①ギリシャのオリンポスから運ばれた「火」である。オリンピックが開催されている間は戦争をしないと言う故事からこの「火」を被爆長崎に灯すことで恒久平和を願う。
- ②当時ギリシャの女優によって、この「火」が長崎に運ばれた。
- ③本モニュメントは、本体、台座、本体の葉面の壁面（被爆瓦取り付け）及び記念のプレート、タイムカプセルから成り立っている。
- ④8月9日の平和の日には、この「火」が終日灯される。
- ⑤毎月9日には灯される。
- ⑥この「火」を通して平和を願い、各地からこの「火」の分灯が行われている。
- ⑦⑥の分灯の際、本体の背面にはそれぞれ記念のプレートを貼ることとなる。
- ⑧平和マラソンなどの競技大会でも、本モニュメントは利用されている。
- ⑨8月9日の平和の日には、訪れた人々によって平和祈願をこめて、それぞれ折り鶴が折られ、本モニュメントの本体の外壁白いタイル上に張られるようになり、次第に盛り上がりを見せている。

##### II 灯火台モニュメントデザインのポイント

###### Aデザインイメージから

これまでの平和モニュメントは、平和を願うあまり悲惨さの表現が多くなされてきた。作者はそれらを認めた上で、更に鎮魂をこめ、新たな平和への希求として、明るくリズムカルなモニュメントを考案した。

## B本モニュメントの形態から

- ①本体の平面図は、「五角の星形」となっていること。フランス語ではこの「五角の星形」のことをパンタクル（PENTACLE）と言い「完全なることの象徴」という意味である。この意味を「五角の星形」に託し恒久平和を祈願して、土台のデザインとした。
- ②本体の形態（あるいは形象）は、ある特定のイメージを持たないものとした。強いて言えば古代ギリシャのオリンピック競技場の灯火台につながる。
- ③本体は、抽象形態を基調にどこから見ても正面であるため、どこからでも平和の祈願への想いをこめることができる。
- ④遠くからも見えるモニュメントにもした。

## C本モニュメントの色彩から

- ①本体の内包する色彩（＝抑制する色彩）であり、ここに平和の思いを託する。
- ②本体は、ランダムに着彩されているが、よく見ると緑色が大地から天上に向けて昇っている。そのことはエコロジカルな色として象徴的に配置した。
- ③本体の内包する色彩は世界各国国旗の色と対応する。
- ④本体の内包する色彩は、行き着くところ折り鶴の色に還元する。
- ⑤本体の「火」と台座との色彩関係は、赤い火に対して台座の呉須の青色は水にたとえている。

## D鑑賞の方法

- ①本体は、前文Ⅰ灯火台モニュメントの「火」の持つ意味・意義・波及（Ⅰ①～⑨）を踏まえ、続いてⅡA,B,Cを通してより理解を深めることができる。以下特に例を挙げて、より一層の鑑賞のしおりとしたい。
- ②前文Ⅱ灯火台モニュメントデザインのポイント、B本モニュメントの形態から（ⅡB④）もわかるように、どこからでも鑑賞できる形態である。
- ③Ⅰ⑤、④により、8月9日平和の日には、本体の「火」が直接見ることができる。
- ④平和マラソンなどの競技大会（Ⅰ⑧）では、そのセレモニーを併せて見ることができる。
- ⑤8月9日（Ⅰ⑨）は、平和の日ならではの体験となり、家族連れ、旅人など平和の輪を広げることができる。

(7月9日2004)

## ※2 作者のメモよりB（アテネオリンピックに向けて、NGOピースボートへ託文）

“カラフルな折り鶴からのメッセージ”

## ①折り鶴の材料について

人間国宝が漉いた和紙ですから、腰が強いことです。何度も折り曲げたり畳んだりしても丈夫であることです。

絵の具はアクリル絵の具を使用しました。

## ②折り鶴のモチーフを選んだ理由

「長崎を最後の被爆地とする“誓いの火”灯火台モニュメント」は、オリンポスの火を灯す目的で、長崎原爆落下中心地の丘に建立されました。このモニュメントの本体のイメージは、平面図で見ますと、五角の星形で、フランス語の“PENTACLE”か



らヒントを得ています。その語の意味は「完全なることの象徴」ということで、このことを平和に託しています。

そして本体は上方に向かって末広がりになっていて、この本体の内側には世界各国の国旗の色、千羽鶴の色、絵の具の3原色、そして五輪の色などが内包されています。これらの色が平和の色となって、大空へ平和の願いをこめて飛び立っています。

近年、長崎被爆の日（8月9日）には、平和の願いをこめて、折り紙で鶴を折り、訪れる方々によってこのモニュメント本体に飾られるようになりました。

以上のような出会いによって、このカラフルで大きな折り鶴を、このモニュメントの内包される色から世界に向かって飛び立つために選びました。

③もうひとつ折り鶴を選んだ理由があります。

折り鶴は、もともと平和や願いごとをこめたものであることは言うまでもありませんが、私が今回特に皆様方にお伝えしたいこだわりは、私たち日本人は昔から風土的に狭い空間であったため、平面的な志向に関心を持ち続けてきたことです。持ち運びには折りたたんでコンパクトにし、イベントでは立体に出来るという折り紙の世界を、その仕草と共にその日本のアイデンティティを、このカラフルな折り鶴にも宿らせていることです。

④最後に、このカラフルな折り鶴が、オリンピアの火の里帰りの使者ともなり、また永遠の世界平和を願っています。

2004年7月9日

長崎の、カラフルな折り鶴の作者から